

令和 2 年 6 月 30 日現在

機関番号：34526

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02869

研究課題名(和文) 自律的学習者育成のための発音記号活用による発音指導プログラムの構築

研究課題名(英文) Teaching Pronunciation Guidelines with Phonetic Symbols to Lead to Independent Learners

研究代表者

河内山 真理 (Kochiyama, Mari)

関西国際大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：50290424

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：一般に発音記号と呼ばれている表記には、多様な変種があり、学習者を混乱させる恐れがあることを、教科書・辞書等を調査から明らかにした。また、学習者が、発音記号を「知って」いても、音は認識できていない実態を調査し、これらの調査結果から、発音について学習が必要な項目を選び出した。同時に指導者となる教員の発音の実態についても調べ、少ない学習項目を身につけさせた後は、自力で応用して学習を深化できる指導用研修案を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、発音指導の立ち後れの改善に貢献できる。教員だけでなく、学習者にとっても重要な情報を提供し、発音教育の改善に大いに役立つ。発音記号を効率的に指導するプログラムにより、音声に関して自立的な英語学習者を養成することが可能になる。学習者は、学んだ発音記号を手がかりにして英語を音声化でき、リスニングの精度をあげることができる。発音学習は音声化を通して、コミュニケーションに至るまで、正の転移を起す有益な学習分野である。

研究成果の概要(英文)： This research has revealed that phonetic symbols used in English textbooks and dictionaries are varied and it may confuse learners. And also learners and some teachers have difficulties to pronounce English sounds even if they know the phonetic symbols. In this research, we picked up phonetic symbols to learn and make a plan how to teach them. Once learners study the pronunciation using phonetic symbols, they can keep on brushing up their pronunciation.

研究分野：英語教育

キーワード：発音記号 辞書 英語学習 研修 教員

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

中学校・高等学校の学習指導要領では、コミュニケーション能力の養成が掲げられており、適切な発音方法を学んでおくことは、英語で意思疎通をするためにも重要である。ここで言う英語発音とは、ネイティブ並みの発音ではなく、国際語としての英語発音(EIL)、日本語の影響が多少あっても意思疎通に支障がないとみなされる発音である。しかしながら、音声によるコミュニケーションの基礎となる発音指導は、日本の学校教育の現状では大幅に立ち遅れている。中学校・高校現場においても教員の発音指導力の不足は明らかであり（河内山・有本、2015）、その結果、発音の習得が不十分となり、リスニングにもスピーキングにも支障を来すことになる。

発音に関しては、教科として学ぶ中学英語から検定教科書にも、辞書にも発音記号が掲載されており、記号がわかれば発音できることになっているが、肝心の発音記号を学ぶ機会がほぼない。実際には、電子辞書を使えば音声が表示されているので発音記号を理解していなくても、モデルの発音を耳にすることは可能であるが、音声モデルは1語につき1種類であり、複数の発音記号が記載されていても違いはわからない。また、中学生を主たる対象としている辞書の大半が、発音記号とともにカタカナを併記している。このカナ表記にも問題がありそのまま読んでも通じないことが多い。発音を通じるように調整・修正する必要性があること、カタカナをもとにした独自表記や補助記号の場合は、それを理解する訓練が必要となり、IPA等の発音表記を覚えるのと同じ手間がかかることを眞砂(2004)が指摘している。日本でしか使えないカナ表記より、発音記号とそれが示す音を学んでおくと、英語のみならず他の外国語学習にも役立ち、英語学習の際にも学習者が自分で辞書の記号を見て発音を理解するという自立学習をも促すことになり、非常に有益な学習項目と言える。

しかし、英語学習者の多くは、発音記号を体系的に学ぶ機会を持たず、曖昧にしか理解していないことが、指導者についての研究からも指摘されてきた（河内山・山本・中西・有本・山本、2011、菊池、2010、柴田・横山・多良、2008、静、2012）。河内山・有本は、予備的調査として、2013年度に、兵庫県内の大学で、教職課程の履修者である大学生に、発音記号の理解度を調査したが、半数がほぼ読めない、1/3が推量で読んでいると回答した。また、中学・高校時代に発音記号を一通り授業で学んだという者は1割しかいなかった。回答者の9割は発音記号を学習することに肯定的で、7割は中学校で指導すべきだと考えていることも明らかになった。

また、発音表記に用いられている記号に差があることが、小川(2002)、上田・大塚(2011)らの中学校検定教科書に関する研究でも指摘されている。中学生が用いる教科書ガイドや、中学生用の辞書のカナ表記も、出版社で異なったルールに従っている（有本・河内山、2015）ためそのまま読んでも英語の発音にはならない。発音記号も、同じ出版社の辞書でも中辞典と大辞典で異なる記号が用いられ、これらの発音記号は国内の独特なルールに従っており、IPAとも差を生じている。さらに、外国の出版社の辞書や音声に関する著作も含めると様々な記号や用語が用いられるなど、発音に関して学習者・指導者を混乱させる情報があふれている。

2. 研究の目的

発音に関する表記および用語について、カナ表記を含めて、どのような記号・用語が用いられ、どう説明されているか調査し、比較資料を作成する一方で、発音記号を含む英語音声を効率よく学ぶために、日本語母語話者にとっての学習における優先順位を明らかにし、これを実現するための発音指導プログラムを提案し、必要なことを学んだ後、学んだことを土

基礎として次のステップへ自ら学習を進めることが可能な自立的学習者を養成する一助になることが目的である。

3. 研究の方法

研究は、①発音記号学習（および音声指導）のプログラム作成と、②英語音声学に関する専門用語の差異を網羅したガイドラインの作成の2つに大別される。

①については、検定教科書、それに準拠した書籍、教員用の指導書と学習者用の参考書、英和辞書、音声に関する書籍などで異なる記号体系で用いられている発音に関する表記および用語について、カナ表記を含めて、どのような記号・用語が用いられ、どう説明されているか調査し、差異がわかる資料等を作成する。

一方で、学習者がどのように発音表記を理解し、音声化しているのかを調査により明らかにし、発音記号・発音指導の最低限必要な項目を洗い出し、指導のためのプログラムを作成する。

4. 研究成果

発音表記については、検定教科書、教授用資料、参考書に加えて初級者用から大学生及び一般向けの英和辞典をレベル別に調べ、初級者用英和辞典と中学生用の参考書は①カタカナ表記、それ以外は、②国際音声表記（IPA）を厳密に採用したもの、③IPAを改変したもの、に分けられた。①③はそれぞれの本が独自ルールを採用しているため同じ音声を表記するのに複数の変種が存在している。英和辞典の場合、初級者用は①、上級者用は②だが、中学生から大学生を対象としたものは、さらに高校受験レベル、大学受験レベル等細分化できるが、それらのレベルに関係なく②③が採用されていることが判明した。同じ出版社でも統一されていない。同じ辞典でも版によって③が②に変わる例もあった。①のカタカナ表記については、初級者に発音の手がかりを与えるという意味では有用であるが、用いられている表記が日本語の音を表すカタカナであるために、それぞれの編者が採用しているルールを理解して解読せず、学習者は日本語の音として理解し、正しい英語音として学習されないという大きな欠点がある。例として、「ス」と「ず」が/s/と/θ/を表しているとしても、学習者は、「ず」が表す音が日本語にない音だとは理解しない。また/s/と/θ/といった別の音であるにもかかわらず、両者とも「ス」で表記する場合もある。初級レベルでカタカナ表記をきちんとした指導なく覚えると英語音声は正しく学習されない。さらに次の学習段階では、発音記号に取って代わっているため、また記号を覚え直さなくてはならず、時間と手間がかかることになり、学習者にとって負担である。またカタカナ表記そのものも本によって異なっているため、複数の辞典を同時に調べるとさらに混乱することになる。

英英辞典の場合は、③に当たるが、英和辞典等で見かけない日本の学習者にはなじみのない記号を用いていることがある。例えば、birdの下線部に対し、英和辞典では/ɔ/や/ɔ:r/となるが、英英辞典では/ɜ:/と表記しているものがある。しかし、注意しなければならない少数の記号を除くと、英和辞典と同様に発音表記を理解することができる。英語以外の外国語辞典については、比較的学習者が多いと考えられるドイツ語、フランス語、スペイン語、イタリア語、ロシア語、中国語、韓国語、イタリア語の辞典を調査した。その結果、IPAを基本とするもの、カナを用いたもの、発音は表示しないもの、があり、中国語の場合はピンインという独自記号を用いて示されていることもあった。

音声表記は、英語学習に必要なとされるだけのIPAを正しい調音法で学習すれば、応用が

利き、多少異なった記号が用いられていても、少し追加学習をすれば、理解できるようになる。ただし、そのために最低限度の発音記号を、正しい発音で理解しかつ再現できるようになっておく必要がある。そのために最低限度学ぶ発音表記を選定した。また同時に現職の小学校教員・教職課程の大学生の英語発音と本人の認識を調べた。発音記号を見知っていてもそれが示す音について理解していない場合もあった。特に母音・子音を含めてアルファベットで使わない文字については、表す音がわからないという場合が多くあった。母音の場合は、なじみのない記号が発音を表記するのに用いられているために「わからない」こと、さらに母語の影響から音の区別ができていないことが多かった。例外として、/æ/は、目にする頻度が高く指導されることが多いため、記号も音も理解されていた。子音の場合は、なじみのない記号は「知らない」と学習者は認識しており、実際に正しく発音できていない可能性も高い。また、辞書を引く際に、発音記号をすべて理解できなくても発音記号を確認する者もいることがわかった。さらに、実際に、発音記号から英単語がわかるのかを調べたが、学習者は「わかっているつもり」だが、発音記号は読めていないという結果が出た。発音記号を学習する上での優先順位として①アルファベットと異なる記号、例えば/ʌ ə ð θ ʃ ŋ/ や/j/のようにアルファベットとしての場合と音声記号としての場合に音価が異なるものや、日本語にない音価の記号がまず挙げられる。次に②発音方法の指導（矯正）を行って発音記号と正しい音を結びつけることが必要である。記号と発音を結びつけることができれば、その後の自立学習にも役立つ。このように調査結果を基に研修プログラムを作成し、大学生を対象に指導し検証することができた。しかしながら、現職教員に対しては、予定していた2020年度末にCOVID19流行のため実施できず、十分検証できたとは言えない。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河内山真理、有本純	4. 巻 12
2. 論文標題 教職課程履修者の発音記号に対する認識と定着度	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育総合研究叢書	6. 最初と最後の頁 89,100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 有本純、河内山真理	4. 巻 12
2. 論文標題 発音指導と発音記号-辞書使用の諸問題-	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育総合研究叢書	6. 最初と最後の頁 101, 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河内山真理、有本純	4. 巻 -
2. 論文標題 中学英語の教授用資料における発音表記の実態調査	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 関西国際大学教育総合研究所叢書	6. 最初と最後の頁 57-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河内山真理、有本純	4. 巻 10
2. 論文標題 中学校用教科書ガイドにおける発音表記の扱い	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西国際大学教育総合研究叢書	6. 最初と最後の頁 131-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 教職課程履修者の発音記号に対する認識と定着度
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 発音指導と発音記号：辞書使用の諸問題
3. 学会等名 外国語教育メディア学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mari Kochiyama, Jun Arimoto
2. 発表標題 Phonetic Symbols in English Dictionaries for English-Learners in Japan
3. 学会等名 FLEAT VII (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 中学英語教授用資料における発音指導の扱い
3. 学会等名 外国語教育メディア学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 発音記号に関する学習歴の実態調査
3. 学会等名 全国英語教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 学習指導要領と発音指導：教授用資料の分析
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 関西支部
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 有本純、河内山真理
2. 発表標題 小中高教員のための英語発音指導法
3. 学会等名 外国語教育メディア学会 関西支部
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 河内山真理、有本純
2. 発表標題 中学校用教科書ガイドにおける発音表記の扱い
3. 学会等名 全国英語教育学会 第42回埼玉研究大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

エイゴハツオンラボ
<http://lethatsuon.sakura.ne.jp/about.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	有本 純 (Arimoto Jun) (50132626)	関西国際大学・国際コミュニケーション学部・教授 (34526)	